

18歳の時に母は病気で急逝した。41歳、下の弟はまだ小学校4年生、長女の私もまだ半分子どもだった。若い頃から丈夫な母は、まさか幼い子を残して旅立つとは思ってもよらなかっただろう。内職収入もあったたので、残された家族は、家事のことやら精神的問題やら経済面やら、二重三重にたいへんだった。

人の寿命は神のみぞ知ることである。明日か来年か十年後かわからないけれど、いつか死ぬことだけは確実だと思いつつながら生きることの原点が、母の死だったような気がする。

どうせ死んでしまう命なのだから、どうでもなれという考え方もあるだろうが、私の場合は幸いにも、せつかくの限りある命を大事にしたいと思うようになった。人類を産み出し一人ひとりの人間を産み出してきた、無数の偶然の連なりに対する敬意があったからかもしれない。

それに加えてどうしても、一人ひとりが持っている可能性を大事にしなければという思いが強い（教育学出身のせいかな）。何年間あるか、何十年間あるかわからない生涯を、精一杯大事に活かさなければもったいない。

私の庭の虫やバクテリアも、有限の命を生きながら死んで分解されて土に帰る。台所のゴミも燃やせば煙と灰だが、コンポストの中で命を育てる堆肥に変身する。有用となりうるものを使わなければもったいない。

生命活動と無縁に見える物だって、材料や、作った人の手間や思いやエネルギーを考えると、やはり精一杯活かさなければならぬという気持ちになる。

そう、「もったいない」である。せつかくの○ ○だ、大切にしなければもったいない。マータイさんのノーベル賞受賞で一躍国際的に有名になる前から、私は「もったいない、もったいない、大事にしなけりやもったいない」と唱えてきた。

今までにゼミの学生を6回社会に送り出した。全員が進路決定済みのめでたい卒業である。大学新卒という一生に一度のビッグチャンスは無

駄にしてはもったいないと学生の尻を叩いた結果だと思う。フリーターになるという学生に何日もかけて「もったいない」の話をして就職活動に行かせたこともあった。

教育の仕事についてから二十年余りになる。学生を見ていると天の神様は不公平だなど思うことがしょっちゅうだ。家族状況に恵まれなかったり、経済的に無理をして進学してきたりする学生がいる。無理なプレッシャーにつぶされる学生もいる。一方で能力にも家庭の経済力にも恵まれたうらやましいような学生もいる。

教員の立場でできることには限りがある。でもせつかくの力である、伸ばしてやらなければ、活かしてやらなければもったいない。練習して伸びる技術なら伸ばさせる、苦手分野がある学生でも社会で有用な部分を活かさせる。一生懸命に取り組んでいると顔付きも変わってくる。

せつかく北国に住むからには楽しまなければもったいない。一度買った洋服やバッグは物の寿命が尽きるまで使わなければもったいない。「もったいない」の口癖はあつちでこつちで出てくる。

唐突なようだが、「もったいない」の敵は戦争である。大事に育ててきた命も大切に使うべき物も破壊してしまう。そして、すべての人や物の命を活かすことが「公益」につながるのではないかと考えている。

○ ○ ○、「もったいない」の気持ちが行き詰まるような熱さになってしまつて、それで体をこわしたら、やはりもったいない。限られた時間をパズル等でつぶしてしまつたらもったいない。けれども楽しむ力やゆとりを味わう力を使わないのももったいない。もったいないは難しい。

それに、人によって考え方には違いがある。タバコという人類の偉大なる発明を吸わなければもったいないと思う人もいるかもしれない、美しい空気をわざわざ汚染するなんてもったいないと思う人もいるのである。

作業をした人	C1	
丸付けした人(赤字で)	C1	